

# 『教行信証』を中国語で読む試み

## ——廻向と他力について——

張 偉

キーワード

教行信証、廻向、他力、漢文と仏教の背景

従来、親鸞の他力廻向のなかでの他力と自力の関係について多岐的な論があるようである<sup>9)</sup>。それらの論を了解した上に、本論は親鸞の言葉そのものに忠実に、言葉の源を探りながら、『教行信証』のなかでの廻向の重層的な意味を追究してみたいと思う。

### 一 廻向についての親鸞自身の言葉と引用された經典の言葉

『教行信証』のなかでの廻向論は、經典の引用の文と親鸞自身の言葉によって成り立っている。そのなかでの親鸞自身の言葉は次のようである。

- 1 謹按浄土真宗有二種廻向。一者往相、二者還相。就往相廻向、有真實教行信証。3頁
- 2 謹按往相廻向有大行、有大信。5頁
- 3 然斯行者、出於大悲願。即是名諸仏称揚之願、復名諸仏称名之願、復名諸仏咨嗟之願、亦可名往相廻向之願、亦可名選擇称名之願也。5頁
- 4 云南無者、即是歸命、亦是發願廻向之意。21頁
- 5 發願回向者、如来已發願回施衆生行之心也。22頁
- 6 凡就往相廻向行信行、則有一念、亦信有一念。34頁
- 7 広由本願力回向。（中略）往還回向由他力。45頁
- 8 謹按往相廻向有大信。大信心者、則是長生不死の神方、忻浄厭穢之妙術、選擇廻向之直心、利他深広之信樂、金剛不壞之真心、易往無人之浄信、心光摂護之一心、希有最勝之大信、世間難信之捷徑、証大涅槃之真因、極速圓融之白道、真如一実之信海也。斯心即是出於念仏往生之願。斯大願名選擇本願、亦名本願三心之願、復名至心信樂之願、亦可往相信心之願也。48頁
- 9 若行若信、無有一事非阿弥陀如来清浄願心之所回向成就。58頁

- 10 欲生即是願樂覺知之心、成作為興之心、大悲回向之心故、疑蓋無雜也。(真實心是名信樂、真實信心。) 59 頁 (欲生者別是如來招喚諸有群生之勅命 65 頁)
- 11 斯心別是不可思議不可稱不可說一乘大智願海、回向利益他之真實心。是名至心。61 頁 (同頁真實者即是如來)
- 12 利他回向之至心、為信樂體。62
- 13 即以真實信樂為欲生體也。誠是非大小・凡聖・定散・自力之回向、故不回向也。(中略) 回向心為首、得成就大悲心故。以利他真實欲生心、廻施諸有海。欲生即是回向心、斯別大悲心故、疑蓋無雜。65 頁
- 14 言信心者、則本願力回向之信心也。72 頁
- 15 是則往相回向之真心徹到故、籍不可思議本誓故也。79 頁
- 16 願以此功德 廻向無上道 93 頁
- 17 煩惱成就凡夫、生死罪濁群萌、獲往相回向心行、即時入大乘正定聚之數。103 頁
- 18 夫案真宗教・行・信・証者、如來大悲回向之利益。故若因若果無有一事非阿彌陀如來清淨願心之回向成就。106
- 19 言還相回向者、則是利他教化地益也。則是出於必至補處之願、亦名一生補處之願、亦可名還相回向之願也。107
- 20 証大涅槃、籍願力回向。還相利益、顯利他正意。是以論主宣布廣大無碍一心、普遍開化雜染群萌、宗師顯示大悲往還廻向、慇懃弘誓他利他深義。119 頁
- 21 至心廻向之願 143 頁
- 22 專心者、專廻向故名專心。151 頁
- 23 信者、即至心廻向欲生之心是也。157 頁
- 24 阿彌陀如來本發果遂之誓悲引諸有群生海。既而有悲願名植諸德本之願、復名係念定生之願、復名不果遂之願、亦名至心廻向之願也。158 頁

(以上の引用は【真宗聖教全書】によるところである。)

このようにまとめにて見ると、親鸞の廻向は「諸有衆生、聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心廻向。<sup>40)</sup>」という【大無量壽經】の言葉を元(もと)にしていることが伺える。

親鸞は【教行信証】の教巻の劈頭に

「謹按浄土真宗有二種廻向。一者往相二者還相廻向。就往相廻向 有真實教行信証」(謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の廻向が有る。一は往相の廻向であり、二は還相の廻向である。往相の廻向に就いて、真實の教行信証がある)<sup>41)</sup>

と述べ、さらに証巻に

「夫案真宗教・行・信・証者、如來大悲回向之利益。故若因若果無有一事非阿彌陀如來清淨願心之回向成就。<sup>42)</sup>」という。ここで示されることは、【教行信証】の根底に廻向があり、その廻向は如來大悲による他力廻向であるということである。

親鸞の廻向論は『教行信証』の次の文によってまとめられる。

「煩惱成就凡夫、生死罪濁群萌、獲往相回向心行、即時入大乘正定聚之數。住正定聚故、必至滅度。必至滅度即是常樂、常樂即是畢竟寂滅、寂滅即是無上涅槃なり、無上涅槃即是無為法身、無為法身即是実相、実相即是法性、法性即是真如、真如即是一如。然者弥陀如来従如来生、示現報応化種種身也。<sup>65)</sup>」(煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の數に入るなり。正定聚に任するゆえに、必ず滅度に至る。必ず滅度に至るはすなわちこれ常樂なり、常樂はすなわちこれ畢竟寂滅なり。寂滅すなわちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなわちこれ無為法身なり。無為法身はすなわちこれ実相なり。実相すなわちこれ法性なり。法性すなわちこれ真如なり。真如すなわちこれ一如なり。しかれば弥陀如来如より来生して、報・応・化種種の身を示し現わしたまうなり。)

即ち、凡夫は、往相回向心行を得ると、その時に正定聚の數に入ることになる。それを故にして「必ず滅度に至る」ことを意味する。必ず滅度とは、即ち、常樂、畢竟寂滅、無上涅槃、無為法身、実相、法性、真如、如である。「一乗者、無異如来、無異法身、如来即法身」。「一乗者、名為如来」「虚空者即是佛性。佛性者即是如来。」(虚空はすなわちこれ佛性なり。佛性はすなわちこれ如来なり。<sup>66)</sup> 必至滅度はすなわち無為法身であり、すなわち、一乗、如来、法身、虚空、仏性である。すなわち、常樂、畢竟寂滅、無上涅槃、無為法身、実相、法性、真如、一如、一乗、如来、法身、虚空、仏性はすべて必至滅度の別名である。

廻向は煩惱と菩提、凡夫と如来、生死と涅槃の回転する点である。廻向は穢土と浄土、衆生の身と如来の身、有為法と無為法の往来する渡り橋であり、人間界(世間)と如来界(超世間)という二つの次元の世界の踊り場である。回転させる力は他力によるものである。「証大涅槃、籍願力回向。」弥陀如来は如より来生して、報・応・化種種の身を示し現わし、「阿弥陀如来本発果遂之誓(至心廻向之願)悲引諸有群生海。」

「發願回向者、如来已發願回施衆生行之心也。<sup>67)</sup>

廻向は阿弥陀の力によるものであるが、それが衆生の身によって実現されるとき、「信心」として現れる。

「阿弥陀如来廻向の眞実信心なり、この信心を阿耨菩提の因とすべしとなり。<sup>68)</sup> 信心は如来より生じる。

「正直弥陀弘誓喚 正直大衆信心回。(正しく弥陀の弘誓の喚いたまうに値えり正しく大衆の信心あつて回するに値えり<sup>69)</sup>

「釈迦如来は実にこれ慈悲の父母なり、種種の方便をもって我等が無上信心を發起せしめたまえり<sup>70)</sup>。

さらに具体的に言えば、信心は念仏によって得られる。

「由聞仏名起信心。<sup>71)</sup> 衆生が信心を起ることは、名号を聞することによるのである。

「小聖、凡夫、五逆、謗法、無戒、闍提みな回心して眞実信心海に帰入しぬれば、衆水海

にいりて一つあちわいとなるがごとし。<sup>12)</sup>」

「一切衆生畢定当得大信心故、是故説一切衆生悉有仏性。大信心者即是仏性、仏性者即是如来<sup>13)</sup>。(一切衆生畢に定んで当に大信心得べきをもつてのゆえに。このゆえに説きて「一切衆生悉有仏性」と言えるなり。大信心はすなわちこれ仏性なり。仏性はすなわちこれ如来なり。

以上は『教行信証』の中での言葉について考察することによって得られる親鸞における廻向の意味だと思ふ。

『教行信証』の廻向論について引用された經典の言葉は次のようである。

- 1 (『論註』) 菩薩出第五門、回向利益他行成就。13 頁
- 2 (『論註』) 云何廻向、不捨一切苦惱衆生心常作願廻向為首得成就大悲心故。廻向有二種相。一者往相、二者還相。往相者、以己功德廻施一切衆生、作願共往生阿弥陀如来安樂淨土。16 頁
- 3 (『論註』) 菩薩出第五門、回向利益他行成就、応知。成就者、謂以回向因証教化地果。若因若果、無有一事不能利他也。36 頁  
『無量寿如来会』若我証得無上覚時、余仏刹那中諸有情類、聞我名、已所有善根心心回向、願生我国、乃至十念、若不生者、不取菩提。唯除造無間惡業誹謗正法及聖人。49 頁
- 4 (『大無量寿經』) 卷下) 諸有衆生、聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心廻向。願生彼国、即得往生住不退転。唯除五逆誹謗正法。49 頁
- 5 (『無量寿如来会』) 他方仏国所有有情、聞無量寿如来名号、能發一念淨信歡喜、愛樂所有善根回向、願生無量寿国者、隨願皆生、得不退転乃至無上正等菩提。除五無間誹謗正法及謗聖者。49 頁
- 6 (『讚阿弥陀仏偈』) 曇鸞) 諸聞阿弥陀德号信心歡喜慶所聞、乃暨一念、至心者回向、願生皆得往。51 頁
- 7 (『散善義』) 善導) 廻向發願生者、必須決定真実心中回向願、作得生想。此心深信、由若金剛、不為一切異見・異学・別解・別行之人等之所動乱破壊。54 頁
- 8 (『散善義』) 善導) 回向者、生彼国已、還起大悲、回入生死、教化衆生、亦名回向也。57 頁
- 9 (『大無量寿經』) 卷下) 至心廻向。願生彼国、即得往生住不退転。唯除五逆誹謗正法。66 頁
- 10 (『如来会』) 愛樂所有善根廻向、願生無量寿国者、隨願皆生、得不退転乃至無上正等菩提。除五無間逆誹謗正法及謗聖者。66 頁
- 11 (『淨土論』) 天親) 云何廻向、不捨一切苦惱衆生心常作願廻向為首得成就大悲心故。

- 廻向有二種相。一者往相、二者還相。往相者、以己功德廻施一切衆生、作願共往生阿弥陀如来安樂淨土。還相者、生彼国已、得奢摩他毘婆舍那方便力成就、廻入生死稠林、教化一切衆生、共向仏道。若往若還、皆為拔衆生渡生死海。是故言回向心為首、得成就大悲心故。66 頁
- 12 【淨土論】出第五門者、以大慈悲觀察一切苦惱衆生、示応化身、回入生死菌、煩惱林中、遊戲神通、至教化地。以本願力回向故。是名出第五門。67 頁
- 13 【散善義】 善導 廻向發願生者、必須決定真実心中回向願、作得生想。此心深信、由若金剛、不為一切異見・異学・別解・別行之人等之所動乱破壊。(二回引用) 67
- 14 【論註】 不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故。住持樂者、謂彼安樂淨土、為阿弥陀如来本願力之所住持、受樂無間也。凡積回向名義、謂以己所集一切功德、施與於一切衆生、共向仏道。69 頁
- 15 【大無量寿經】卷下) 諸有衆生、聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心廻向。願生彼国、即得往生住不退転。71 頁
- 16 【淨土論】出第五門者、以大慈悲觀察一切苦惱衆生、示応化身、回入生死菌、煩惱林、遊戲神通、至教化地。以本願力回向故。是名出第五門。107 頁 (二度引用)
- 17 【論註】 還相者、生彼国已、得奢摩他毘婆舍那方便力成就、廻入生死稠林、教化一切衆生、共向仏道。若往若還、皆為拔衆生渡生死海。是故言回向心為首、得成就大悲心故。107 頁 (二回引用)
- 18 【論註】 如是成就巧方便回向。如是者、如前後広略皆実相也。以知実相故、則知三界衆生虚妄相也。知衆生虚妄、則生真実慈悲也。知真実法身、則起真実帰依也。慈悲之與帰依巧方便、在下。何者菩薩巧方便回向。菩薩巧方便回向者、謂説礼拝等五種修行所集一切功德善根、不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故、作願攝取一切衆生、共同生彼安樂仏国。是名菩薩巧方便回向成就。(113 頁)
- 19 【論註】 凡積回向名義、謂己所集一切功德、施於一切衆生、共向仏道。巧方便者 (下略) (114 頁)
- 20 【論註】 菩薩如是善知回向成就、即能遠離三種菩提門相違法。(114 頁)
- 21 【論註】 方便智業者回向也。(117 頁)
- 22 【論註】 以本願力回向故、是名出第五門。(118 頁)
- 23 【大無量寿經】 同安樂仏国、即必顯仏性。由本願力回向故。140 頁
- 24 【散善義】 言廻向發願心者、過去及以今生身口意業所修世・出世善根、及隨喜他一切凡聖身口意業所修世・出世善根、以此自他所修善根、悉皆真実深信心中回向、願生彼国。故名回向發願心也。151 頁
- 25 【大無量寿經】 設我得仏、十方衆生、聞我名号、係念我国、植諸徳本、至心回向、欲生我国、不果遂者、不取正覚。158 頁

26 (『無量寿如来会』) 若我成仏、無量國中、所有衆生、聞説我名、以己善根、回向極樂、不生者、不取菩提。158 頁

27 (『阿弥陀經義疏』元照) 一切福業、若無正信、回向願求、皆為少善。非往生因 161 頁

(以上の引用は『真宗聖教全書』二による。)

これらの論は親鸞の言葉の裏づけになり、廻向の他力と利他を強調されている。廻向の裏には、他力の綱が張り付いている。確かに、言葉として利他だけを語っていて、他力があまり強調されていないようであるが、その理由は廻向の本来の意味するところを探るとわかってくる。

## 二 仏教における廻向の本来の意味

廻向という言葉の元に遡って考察すれば、十八願がよるところになる。

「諸有衆生、聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心廻向。願生彼国、即得往生、住不退転。」(あらゆる衆生、その名号を聞き、信心歡喜せんこと、乃至一念せん、至心に廻向して。かの国に生まれんと願ずれば、即ち往生を得て、不退転に住す。<sup>(44)</sup>)

この文の廻向という動詞の主語は「衆生」であるが、「聞其名号」という言葉によって衆生が廻向する原動力は名号であることを意味する。如来のはたらき(名号)によって衆生の心が信心として働き、それより歡喜を生じ、「南無阿弥陀仏」の声がついに乗せられてくる。それはすなわち、「至心廻向」である。廻向が「至心」から生じてきたものである。至心は至極の心、『教行信証』の「信」の巻で「信、実、誠の種」と名付けられている。その心は、願力に乗らなければ、「至極」にならないので信心と名付けられないのである。

如是諸法真如法性。無向無背無縛無脱無染無淨。我於如是功德善根現前隨喜。以無移轉及無失壞。無相無得而為方便。廻向無上正等菩提。如是名為最尊最勝最上最妙隨喜廻向。

(是の如く諸法の真如法性は向無く背無く縛無く脱無く染無く淨無くし。我れ是の如き功德善根に於て現前に隨喜し。移轉無く及び失壞無く相無く得無きを以て方便と為し無上正等菩提に廻向せんと。是の如きを名づけて最尊最勝最上最妙隨喜廻向と為す。<sup>(45)</sup>)

「所種善根合集秤量。是諸福德以最大最勝最上最妙心隨喜。(中略)於是心中不生心相。則是廻向阿耨多羅三藐三菩提。(中略)能以是福德廻向。於前有所得心布施福德。百分不及一。千万億分不及一。乃至算數譬喻所不能及。(中略)何以故。是菩薩廻向為般若波羅蜜所

護故。<sup>(16)</sup>」

「真如法性」を前にして、廻向が向と背、縛と脱、染と浄などという分別によって作られた一切の二元対立を超えて意志の働きに絶対に縛られない最尊最勝最上最妙の随喜と言える。「喜」は、信樂の「樂（欲・願・慶・喜・樂）<sup>(17)</sup>」に含まれるものである。「この信心をうるを慶喜といふ。慶喜するひとは諸仏にひとしきひととなづく。慶はうべきことをえてのちによるこぶこころなり、信心をえてのちによるこぶこころなり。喜はこころのうちにつねによるこぶこころたえずして憶念つねなるなり。<sup>(18)</sup>」そのように常に喜ぶ心を「随喜」という。つまり、随喜廻向は人間の計らいを超えるものであり、如来の働きに従うものであるので、至極無上の「随喜」になる。喜とは以上に引用された親鸞のことばのとおりであり、随とは「随順」である。「無有能説可説、亦無能念可念名為隨順。」『真宗聖教全書』二141頁。

そういう釈尊の教えを踏まえて、『浄土論』に衆生が浄土に往生し仏になろうとする実践を、天親は「五念門」として説いている。五念門とは、仏を礼拝する礼拝門・如来の名を称し如来を賛嘆する賛嘆門・一心に仏の国に生ぜんと作願する作願門・仏の国の莊嚴を觀察する觀察門・一切の衆生の苦を抜かんがために、自己の作った功德を廻転して衆生に廻施し、一切の衆生とともに浄土に往生を願う廻向門という五門である。

五念門の中で、礼拝門・賛嘆門・作願門・觀察門という四門は「自利修行成就」と言い、自利的な修行であるが、第五門廻向門は、「利益他功德成就」と言い、利他的な修行である。第五門廻向門については「云何廻向。不捨一切苦惱衆生。心常作願廻向為首成就大悲心故。（いかんが廻向するか。一切の苦惱の衆生を捨てずして。心に常に作願す。廻向を首として大悲心を成就するを得るが故に。）<sup>(19)</sup>」と述べている。すなわち廻向は「利他」によって特徴づけられている。

文の中に如来の働きの表す「他力」は言葉に出ていないが、「成就大悲心」とは廻向とする運動の源を示している。そしてその言葉のあとに、「以本願力廻向」とはつきり「本願力」を元にすることを表明している。

「廻向」は「回向」とも書く。「廻向」と「回向」は仏教用語として厳密には使い分けられていない。もともと「帰る」を意味する「回」という漢字を使うが、だんだんと、「回」は「道が遠い」を意味する「廻」に代えられ、「廻向」の方は仏教用語として定着されてきたようである。

仏教の辞書は廻向について次のように解釈している。

「廻者、廻転也、向者趣向也、廻転自己所修之功德趣向於所期、謂之廻向。」

(廻とは廻転なり、向とは趣向である。自己が修めた功徳を廻転して、期する所に趣向する。これを廻向という。<sup>(20)</sup>)

「以大慈悲心救護一切衆生謂之廻向」(大慈悲心を以て一切衆生を救護するは廻向という)<sup>(21)</sup>。

「廻向、以一切所修之善根、向於衆生、又向於仏道。」(廻向とは、一切所修の善根を以て、衆生に向わせ、又仏道に向かわせる)<sup>(22)</sup>。

「『廻向』は『回向』とも書く。めぐらしさしむけること。如来がその徳を衆生にめぐらし施して救いのはたらきをさしむけること。自己の心をひるがえして願力に向かわせること。<sup>(23)</sup>」

仏教の基本原理によれば、宇宙万有は、すべて真如(法)によって生成し、顕現している。真如は常に有為法と無為法として働いている。無為法は常住不変、静的、無形、永遠無限であるが、有為法は生滅変化、動的、有形、限界がある。有為法は、目に見える現実のすべてであり、無為法はすべての現象の裏に働いている。その二元的な真如は救済として働くとき、「智慧と方便」であり、仏の身で現れると、「法性身」と「方便身」である。道綽の『安楽集』の言葉で言えば、法身は「無色、無形、無現無著、不可見、無言説無住処、無生無滅。<sup>(24)</sup>」「真如実相第一義空」、「自相清浄体無汚染。理出真、不仮修成。<sup>(25)</sup>」(法身は、「真如実相第一義空なり。自性清浄にして、体に穢染なし。理天真に出でて修成をからざるを名づけて法身と為す。」

有為法と無為法・法性身と方便身、二つは二元的なものであるが、「異而不可分、一而不可同(異にして分かたべからず、一にして同じかるべからず)」という「不一不異」の関係にあり、二つは常に同時に働いている。「慈悲方便相縁而動、相縁而静。動不失静智慧之功也。静不失動便之力也。」(慈悲と方便と相縁じて動じ、相縁じて静なり。動、静を失わざることは智慧の功成り。静、動を失わざることは方便の力なり。<sup>(26)</sup>)

原理の二元性とともなにも仏教には教えも二元性がある。「方便と真実」、「権と実」、「事と理」、「隠と顕」、「法性法身と方便法身」など。

また仏教の基本原理によれば、人間の心は海の中の一滴の水のように真如とともに働いているはずである。そのような人間の心が世界を有為法と無為法を共に如実のままにとらえ、とらえられる世界相は真実であり、一如である。「広略皆実相也。」『真宗聖教全書』二113頁)しかし、人間の心が現象にとらわれ、真実を見失い、真如から離れ、自我の殻を作っていった。自我執着心にとらわれた人間の心は「自我」という円心に向かう向心力の運動になり、現象しか見えなくなり、世界を分別的にとらえる。そのような人間の心にとらえられる世界相は「汚染相」、「破壊相」(『真宗聖教全書』一288頁)である。しかし、

そうであっても衆生の心の深いところに真如に帰る可能性が潜んでいる。

一切衆生悉有佛性、煩惱覆故不能得見（一切衆生はことごとく佛性あれども、煩惱覆えるがゆえに見ることを得ることあたわずと）<sup>(27)</sup>「一切衆生雖復無常、而是仏性常住无変（中略）。衆生佛性非内非外、猶如虚空。<sup>(28)</sup>」（一切衆生また無常なりといえども、しかもこれ仏性は常住にして変なし（中略）。衆生の仏性は非内非外にして、なお虚空のごとし。）

そういう人間の心が本願の力によって、あらためて真実に目覚め、自我に向かう働きの方向を反転して、無数の衆生と永遠無限な菩提（真如）へと向かい、自我に対する遠心力運動になることを廻向という。

「煩惱成就凡夫、生死罪濁群萌、獲往相回向心行、即時入大乘正定聚之數。住正定聚故、必至滅度。必至滅度即是常樂、常樂即是畢竟寂滅、寂滅即是無上涅槃、無上涅槃即是無為法身、無為法身即是実相、実相即是法性、法性即是真如、真如即是一如。」（必ず滅度に至るは、すなわちこれ常樂なり。常樂はすなわちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなわちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなわちこれ無為法身なり。無為法身はすなわちこれ実相なり。実相はすなわちこれ法性なり。法性はすなわちこれ真如なり。真如はすなわちこれ一如なり。）」（103頁）

と表明されたように、廻向は自我執着的な心の働きが真如へと向う回転を示している。「方便智業者回向也。<sup>(29)</sup>」その回転は、如来の方便におこなわせる運動である。それは仏力に乗じるので、「廻向遍廻衆善（廻向は遍く衆善を廻し）」、「廻向通廻已起未起一切善法（廻向は通じて已起、未起の一切の善法を廻す）」<sup>(30)</sup>といわれるように、人間の計らいを超えた廻向の徳は一切の善を極まるものである。

そのような廻向を【論註】で、「遠離我心貪著自身我心（我心、自身に貪著するを遠離せる）」、「無安樂衆生心（無安樂衆生心を遠離せる）」、「遠離供養恭敬自身心（自身を供養し恭敬する心を遠離せる）」という「遠離三種菩薩門相違法（三種菩提門相違法を遠離する）」として説いている<sup>(31)</sup>。

以上の考察に見られるように、仏教のもともとの意味での廻向は如来の力に乗る、他力に随順することを前提として成立するものである。廻向という利他が実現すると同時に、すでに他力の船に乗っていることになる。さらに言えば、他力の船に乗っているからこそ、本当の利他がはじめて可能になるのである。「利他真実 易行道 淨土門 横超 如来誓願 他力也<sup>(32)</sup>」「乘彼願力、即是利他信海也<sup>(33)</sup>」「以本願力廻向故 利他行成就<sup>(34)</sup>」すなわち、廻向という運動そのものは他力を除いては成立できない。自力と他力と分けて問題にするのは廻向の前の段階のことである。二元対立的な意味合いの自力と他力を超え、一如になっ

て実現される廻向は、絶対他力で、その中に人間の計らいのレベルの自力が溶かされ、また自力と対立する他力も溶かされる。すなわち、利他を特徴とする廻向は、絶対他力によって裏づけられている。廻向自体についてはもはや自力か他力かと論じる余地はなくなるはずである。

仏教の經典の諸師の中での廻向論は、そういう仏教の本来の指向の意味を前提としている。例えば、『観経疏』（善導）「廻向発願心」について「過去及以今生身口意業所修世・出世善根、及隨喜他一切凡聖身口意業所修世・出世善根、以此自他修善根悉皆真實深信心中廻向願生彼国<sup>(35)</sup>」「悉皆真實深信心中廻向願生彼国」という善導の言葉も言葉の表層に他力を表わしていないが、廻向が真實深信心のなかに生じるものであると表明している。

曇鸞の『論注』の最初に、天親の『往生論』の易行道と難行道の往生について論じるとき、「唯是自力無他力持<sup>(36)</sup>」と、自力と他力を論じているが、次のような廻向について説明する部分には「往相者、以己功德廻施一切衆生、作願共往生彼阿彌陀如來安樂淨土。還相者、生彼土已得奢摩他 婆舍那方便力成就、廻入生死稠林、教化一切衆生共向仏道。<sup>(37)</sup>」（往相とは、己の功德を以て一切衆生に廻施し、共にかの阿彌陀如來の安樂淨土に往生せんと作願する。還相とは、かの土生じ已りて奢摩他 婆舍那方便力成就せんことを得て、生死稠林に廻入し、一切衆生を教化して共に仏道に向かわしむるなり）と自力・他力を表わす言葉を出していない。なぜなら廻向は往生の中で乘仏願力という高次元的なものであるからである。曇鸞は天親の『淨土論』の五念門について論じるとき、「以本願力回向故、是名出第五門」という言葉を引用して、「乘仏願力便得往生彼清淨土」（仏願力に乗じて便ち彼の清淨の土に往生を得）を「至極不退の風航」に譬え<sup>(38)</sup>、「乘仏願力」、「以本願力」と、廻向は他力を前提としていることを表明している。特に「修五門行以自利利他成就故。然厭求其本、阿彌陀如來為増上縁。」と廻向は阿彌陀如來を源にすることを言明する。「阿彌陀如來為増上縁」とは「乘仏願力」を意味するので、「増上縁」は如來の加被力を意味し、他力の別名である。）「広由本願力回向。（中略）往還廻向由他力。」という親鸞の言葉と同じことを語っていると言えよう<sup>(39) (40)</sup>。

次の慧遠の廻向論も簡単に自力廻向を主張しているとは断言できないと思う。

「言廻向者。廻己善法有所趣向。故名廻向。廻向不同。一門説三。一菩提廻向。二衆生廻向。三實際廻向。菩提廻向者。是其趣求一切智心。廻己所修一切善法趣求菩提一切種徳。名菩提廻向。衆生廻向者。是其存念衆生之心。念衆生故廻己所修一切善法願以與他。名衆生廻向。（中略）三實際廻向。是厭有為求実之心。為滅有為趣求实际。以己善根廻求平等如実法性。名实际廻向。<sup>(41)</sup>」

（廻向と言うは、己の善法を廻して趣向する所有るが故に廻向と名く。廻向は不同なり。一門に三を説く。一に菩提廻向、二に衆生廻向、三に实际廻向なり。菩提廻向とは。是れ

其の一切智を趣求するの心なり。己が所修の一切の善法を廻して、菩提一切の種穂を趣求するを菩提廻向と名く。衆生廻向とは。是れ其の深く衆生を念ずるの心なり。衆生を念ずる故に、己が所修の一切の善法を廻して以て他に與へんと願するを、衆生廻向と名く。(中略) 三に實際廻向とは。是れ有為を厭ひ実を求むるの心なり。有為を滅して實際を趣求せんが為に。己善根を以て廻して平等如実の法性を求むるを、實際廻向と名く。)

論の中に言葉として出ていない主語は人間であり、「諸有衆生、聞其名号、信心歓喜、乃至一念、至心廻向。」という【大無量寿経】の文のなかでの「聞其名号」という廻向の原動力を表わす意味も言葉では表わされていないが、その人間の心が「於大菩提起意趣求<sup>(42)</sup>」と、大菩提を元にして働くことを前提としている<sup>(43)</sup>。

### 三 親鸞に於ての自力と他力

今までの考察によれば、自力と他力の対立を超えるところにこそ廻向があることが明らかになっている。次は【教行信証】の言葉を元にして親鸞に於ての自力と他力について考察してみよう。まず、親鸞の廻向のなかでの他力は自力と対立するものだという先行の研究について考察してみたいと思う。

一口に他力といっても次元的に異なっているところがある。自力、他力（自力と対立するもの）、他力（自力と他力の二元対立を超えたもの）という多元的に往生の働きを語るところには、仏教の人間を救済する重層的な考えが据えられている。

自力とは、「人畏三塗故受持禁戒（中略）。如是等名為自力。<sup>(44)</sup>」といわれるように救済を願う人間の気持ちで（人間の計らいで）往生しようとすることである。他力とは、如来の力で、浄土信仰の中の阿弥陀如来の本願力である。「言他力者如来本願力也<sup>(45)</sup>」「十方群生海、歸命斯行信者、攝取不捨、故名阿弥陀仏。斯曰他力。<sup>(46)</sup>」そういう他力は自力と他力の二元対立を超えたものであるが、人間の心から離れた架空的なものではない。「隨順名譽與光明 以斯信心一心 煩惱成就凡夫人 不断煩惱得涅槃（中略）高原陸地不生蓮 卑濕淤泥生蓮華 此喻凡夫在煩惱 泥中生仏正覺華 斯示如来本弘誓 不可思議力即是 入出二門名他力<sup>(47)</sup>」という言葉に示されるように、他力は衆生の心が如来の心と一如になるものである。

他力を自力と対立するものとして語るとき、それは、仏教の「方便」である。自力、他力（自力と対立するもの）、他力（自力と他力の二元対立を超えたもの）という多元の働きの中に、如来の多元的な方便智慧が働いている。それについて親鸞は「化身土」で詳しく論じている。先行研究で、「三願転入」でとらえている<sup>(48)</sup>。

「或於此方破惑証真、則運自力故、談大小諸經。或往他方聞法悟道、須憑他力故、説往生淨土。彼此雖異、莫非方便令悟自心<sup>(49)</sup>」すなわち、仏教の教えの中で自力と他力を分けて言っているが、それは心が真実に到達するために、しばらく仮に使われる方便、真実に導く方法にすぎないのである。

「凡聖逆勝齊回入<sup>(50)</sup>、阿弥陀本願に帰することこそ、真実に到達する最高次元の救済である。その究極において自力と他力が「一」になり、自他共に真実である。「一心淳心名如実<sup>(51)</sup>」「如是成就方便廻向。巧如是者、如前後広略皆実相<sup>(52)</sup>」「一乗者、大乘、大乘者、仏乗。得一乗者、得阿耨多羅三藐三菩提（無上正等覺）。阿耨菩提者、即是涅槃界、涅槃界者、即是究竟法身。得究竟法身者、即是究竟一乘。……<sup>(53)</sup>」即ち、本願の救済の世界は、自力と他力の究極に現れてくる自他の二元対立を超える他力である。それは、絶対の一乗の他力である。「本願一乘、頓極・頓速・圓融・圓滿之教者、絶対不二之教、一実真如之道也。<sup>(54)</sup>」他力の願船に乗っている自力は、次的に更新させられるので、「三業所修、一念一刹那、无不清淨、无不真心。<sup>(55)</sup>」になる。「如来以清淨真心、成就圓融无碍不可思議不可称不可説至徳。<sup>(56)</sup>」そこで自力は他力が実現される場になる。その場は「圓融至徳嘉号」の中で、如来の心から離れたた衆生の心がもともとあるべきところである。すなわち、自他の二元対立を転じて「圓融一体」に成る。そのことを念仏者の身で実感した親鸞は、生身の感覚から他力論の言葉を汲み上げた。それは小さい一滴の水が永遠無限な大いなる願海に包まれながら、また小さい一滴の水が永遠無限な大いなる願海を受け入れるという「廣略相入<sup>(57)</sup>」の世界である。

以上の考察によって親鸞にとらえられた他力と自力の関係は、仏教の基本的な考えに基づくものであることが明らかになるといえよう。民族の言語の異なりがあっても、親鸞と仏教祖師たちの廻向にある利他と他力の関係ではほぼ一致していると言えよう。

このことが『教行信証』の中で廻向についての「信心」、「至心」という言葉の使い方にも伺える。例えば、次の言葉である。

「以利他廻向之至心、為信樂體也（利他廻向之至心を以て信樂の體と為る）。「言信心者即本願力廻向之信心也<sup>(58)</sup>（信心と言うは即ち本願力廻向の信心なり）」

ここでの「至心」、「信心」とは、衆生の身に現れるものであるが、衆生が如来と出会うところに生じたものである。「報土因果顕誓願 往還廻向由他力」「正定之因唯信心 惑染凡夫信心發<sup>(59)</sup>」という言葉に表明されたように、本願・他力は信心の体であり、芯であり、源である。

他力の船に乗らなければ廻向は成立できないと述べてきたが、それは、他力を以て自力を抹殺し、泯ずるものではない。自力と他力が、包容し合う、包み包まれる関係である。行の巻ではの「対論」のなかで、「教」と「機」について「善悪対」「是非対」などとさま

ざまな二元対立的な「対」を述べ、その中に「自力他力対」もあるが、その後は、「然」（意味の転換を表わす助詞）という言葉によって一転して、次元的に高くなる。

「然按本願一乘海、圓融満足極速无碍絶対無二の教」。

「然按一乘海之機、金剛信心絶対不二之機<sup>(60)</sup>」

言葉に見られるように、「本願一乘海」と「金剛信心」は、「絶対無二」、「絶対不二」の非対立的な一元性を明示している。「一乘海」・「絶対無二」は、「諸法圓融而融和」、無二無別の一如の世界である。大と小、自己と他者、衆生と如来。「須弥之入芥子、毛孔之入大海<sup>(61)</sup>」という不思議さは、人間の心が大いなる真如（大いなる心）に包まれながら、真如を内包しているという「広略相入」、「圓融一体」の世界で実現されるものである。【教行信証】の総序には最もよくそれを明示する言葉がある。

圓 融 至 徳 嘉 号 転 悪 成 徳 正 智  
難 信 金 剛 信 樂 除 疑 獲 証 真 理<sup>(62)</sup>

「圓融至徳」の嘉号・他力の世界に、悪（自我執着的な心の働き）は自ずから徳（慈悲）に転じられる。転じられるのは、名号の働きであるが、その働きに応じて証するのは、衆生側の「難信金剛信樂」である。

衆生側の働きを、他力の願船に乗らせるならば、「三業所修、一念一刹那、無不清浄、無不真心。」（中略）如来以清浄真心、成就圓融無碍不可思議不可称不可説至徳。<sup>(63)</sup> というように、自力と他力は「無二無別」になり、対立を超えた他力の一如の世界が現れてくる。そこには他力を離れた自力も自力を離れた他力もなくなる。

金剛心（中略）即是大慈悲心、是心即是由無量光明慧生故、願海平等故発心等、発心等故道等、道等故大慈悲等、大慈悲者是仏道正因故<sup>(64)</sup>。

（金剛心（中略）すなわちこれ大慈悲心なり。この心すなわちこれ無量光明慧に由って生ずるがゆえに。願海平等なるがゆえに発心等し、発心等しきがゆえに道等し、道等しきがゆえに大慈悲等し、大慈悲はこれ仏道の正因なるがゆえに<sup>(65)</sup>。）

ここで明示した金剛心と大慈悲心が「一」になる関係は、すなわち「圓融至徳嘉号」と「難信金剛信樂」の関係であり、すなわち廻向の中での自力と他力の関係である。

衆生の心・業識と本願の清浄業・他力の関係について親鸞の次の言葉も参考になる。

「本願名号正定業 至心信樂願為因<sup>(66)</sup>」

「真実の信をえたる人は大願業力のゆへに自然に浄土の業因たがはずして、彼の業力にひかるゆへにゆきやすく无上大涅槃にのぼるにきわまりなしとのたまへるなり、しかれば自

然之所牽ともうすなり、他力の至心信樂の業因の自然にひくなりとなり。<sup>67)</sup>

#### 四 日本語訳に於ける親鸞と法然の違い

親鸞の独自の他力思想の最も根拠となるところは、廻向の訓読にあることはたくさんの人々に指摘されている<sup>68)</sup>。次は廻向の訓読において、法然と親鸞の違いについて管見を述べよう。

法然は廻向を「廻向し」と訳し、それに対して親鸞は「廻向したまへり」と訳したとということについてである。

廻向という言葉は、漢字だけで伝達機能が働く漢文のなかで、衆生・如来・衆生と如来という多元的な働きを一つ言葉で多義的・重層的・非限定的に表現することができる。しかし、返り点をつけなければ動詞として機能しない日本語では、それが不可能になる。すなわち、廻向という言葉は、日本語に訳するとき、多義性のなかでの一義を選ぶことを迫られ、曖昧のままでは許されないことになる。すなわち、漢文の「廻向」は「廻向す」と「廻向したまふ」という二つの動詞体を同時に含むことが可能であるが、それを日本語に訳す際、二者択一の選択を迫られることになるのである。漢文の仏教用語を日本語に訳したときの微妙な言葉のずれに直面して法然は躊躇せずにおられなかったようである。

法然は『選択集』で「悉皆真実深信心中廻向<sup>69)</sup>」などのところで「廻向し」と言うふうに戻り点をつけた。この選択には法然のやむを得なさ、躊躇も含まれていると思う。

しかし、「廻向し」と訳しても、廻向は他力でなければならないことを、法然はとらえていないはずはない。例えば、『観経疏』（善導）の正雑二行についての解釈は、「発願廻向」と「不廻向」という言葉を使い、「從令別不用廻向、自然成往生業<sup>70)</sup>」を述べて、願力に乗って人間の計らいで廻向しようとする必要はなくて、自然に往生の業が成るという他力廻向についての論である。法然が廻向という言葉に内包されている他力をとらえていないとは考えられない。

しかし、廻向の日本語翻訳に込められた法然の多重性は言葉そのものによっては伝えられなかった。法然を通して、廻向が日本語化した「廻向し」になるとき、助動詞の中に帯びている自力要素によって他力が綱のように張り付いているその言葉の中の芯を柔軟化させられ、廻向という言葉にある動かしがたい他力の位置が揺れ動くことになる。それはまた法然にとっては不本意のことであろう。

「廻向」に「廻向し」というふうに戻り点をつけながら「不廻向」（廻向しない。それについてあとで詳しく論じる）」と主張する言語表現の二律背反の中に、廻向の真意を会得しながら、それを十分に表現できない母国語としての日本語の限界に感じられた法然の困惑

も伺える。それは法然が直面していた矛盾である。すなわち、法然が直面したのは、仏教の基本原理解（自力廻向か他力廻向か）について理解する問題ではなく、中国語である漢文の表現と日本語の表現という民族の言語の溝を越えて、仏教の真髓を日本の人々にどう伝えるかという問題である。

それはまた親鸞が直面した困難な課題でもある。法然に訳された廻向がもたらした誤解を是正しなければならないことを痛感しながら、法然への師としての恩に「骨を砕きても謝すべし」というほど深い感謝を抱いた親鸞にとって、それは至難な課題だと思う。親鸞は困難な努力をしたように思われる。それは親鸞が著作の中で引用した廻向という言葉の返り点の付け方にも伺える。例えば次の文である。

【無量寿如来会】（巻上）に「所有の善根心廻向せしむ」（『顕浄土真実信文類三』親鸞聖人真跡） 主格・主語・動作の主体は如来である。使役体。平常体。

【無上寿如来会】（巻上）所有の善根廻向したまへり」（『顕浄土真実信文類三』親鸞聖人真跡） 主格・主語・動作の主体は衆生である。完了体。

本願成就文「信巻」「至心に廻向せしめたまへり」（『顕浄土真実信文類 三』親鸞聖人真跡） 主格・主語・動作の主体は如来である。使役体。完了体。

【浄土三教往生文類】「至心に廻向したまへり<sup>(73)</sup>」 主格・主語・動作の主体は衆生である。完了体。

「親鸞では『せしめたまへり』と『したまへり』とは同一の意味に使われたと見ることができよう<sup>(74)</sup>」というとらえ方があるが、この言語表現のずれにこそ、親鸞によってとらえられた、常識的な日本語表現によって伝えられない廻向の真意が伺えるのではないかと思う。

如来と衆生という主格の二重性、平常体・完了体・使役体という動詞体の多様性によって、廻向の中での如来と衆生の「不一不異」、「異而不可分、一而不可同」（異にして分つべからず、一にして同じかるべからず）という「廣略相入<sup>(75)</sup>」の関係がダイナミックに表現されている。

その重層的な表現は、また言葉でとらえ切れない意味を無限に掘り下げる可能性も言葉と言葉のずれの場、その空間的な余裕の中に用意されることになる。

その上に親鸞は言葉を尽くして、廻向の本来の意味での他力性を表わしている。

誠是非大小・凡聖・定散・自力之廻向、故名不廻向也<sup>(76)</sup>。

如来の廻向に帰入して

願作佛心をうるひとは

自力の廻向をすてはて、  
利益有情はきはもなし<sup>(75)</sup>

この本願力の廻向をも如来の廻向に二種あり<sup>(76)</sup>。

弥陀如来廻向の真实信心を阿耨菩提の因とすべし<sup>(77)</sup>

「往相廻向の大慈より 還相廻向の大悲をう 如来の廻向なかりせば 浄土の菩提はいかがせん。<sup>(78)</sup>」

「今將談仏力、是故以利他言之。當知此意也、凡是生彼浄土、及彼菩薩人天所起諸行、皆縁阿弥陀如来本願力故<sup>(79)</sup>。(今將に仏力を談ぜんとす、この故に利他を以てこれを言う。當に知べし、この意なり。おおよこれ、かの浄土に生まると、及よびかの菩薩・人・天の所起の諸行は、皆阿弥陀如来の本願力に縁るがゆえに。)」

「夫案真宗教・行・信・証者如来大悲廻向之利益。故若因若果无有一事非阿弥陀如来清浄願心之所廻向成就。<sup>(80)</sup>」(夫れ真宗の教・行・信・証を案ずれば如来の大悲廻向の利益なり。故に若しは因、若しは果、一事として、阿弥陀如来の清浄願心の廻向成就したまへるところにあらざることあることなし。)

破らなければ廻向の真髓に伝えられない常識的な日本語表現を敢えて破り、「廻向」の翻訳に独自の表現を用いたことは、「唯念仏恩深、不恥人倫嘲」(後序)という世間に妥協せず信心を貫いていく親鸞の一貫的な姿勢によるものであるが、そこに常識的な日本語表現で仏教の真髓を伝えることの難しさと、「廻向」を「廻向し」と訳した法然のやむを得なさも、鋭角的に反射されていると思われる。法然と親鸞の訳し方には、漢文によって伝わってきた仏教の真諦を日本の風土に活かすために、二人の仏教指導者がそれぞれおかれた状況下で付した心血と困難な努力が感じられる。親鸞のさまざまな訳にさらに法然の訳を加えて、より完璧な廻向という言葉の日本語訳と言えるのではないかと思う。

廻向の訳し方を是正しながら、親鸞は法然を否定することをしなかった。また、他力を強調しながら、親鸞は自力を否定する極端まで行かなかった。親鸞の廻向論は自他对立を超えた一元の世界である。その中に法然の訳をも自力をも包んでいる。

仏教の真髓に深く入っていった親鸞は、もっとも深いところに、隔たりのない心の層に到達したのであろう。一切の民族の枠も、言語の限界も溶かされた。そこに、親鸞は仏教の他力を自己に内在する民族感情の中に溶かした。その他力は、「円融至徳」という言葉に

とられる人間の計らいの次元の作為を超えた、自と他の二元対立を超えた非対立的な「圓融一体」の一元の世界、「自然法爾」の世界である。民族の言語表現の溝、日本語の言葉の限界は親鸞によって超えられた。

そこにおいて民族の感情の隔たりは自然に埋められ、異なる民族の言語の形式も自ずから破られる。親鸞は釈迦、七高祖の教えを一人の日本人の生身の感受性で主体的に味わい、自分自身の血肉で温める。親鸞にとっては、もはや漢民族の言語で語られた仏教の教えをいかにして日本の人々に伝えようとするかというレベルのものではなく、生身の日本人が生身の人生感覚で感得した普遍的な仏教真理を自分自身のものとして流露し、母国語である日本語で心底の宗教感情を思うままに表出することになる。親鸞は言語の表現の時代性と民族性の束縛を超え、廻向の他力の意味の真相をとらえることになる。そうであればこそ、漢文の表現の曖昧さをも乗り超えられたのである。例えば次の文である。

「不捨一切苦惱衆生心常作願廻向為首得成就大悲心故。<sup>(83)</sup>」

という漢文に次のように訓点を施し、「一切苦惱衆生を捨てずして、心に常に作願すらく。廻向を首と為して大悲心を成就することを得えたまへるがゆえにとのたまえり」と敬語を用いることによって、廻向の裏にある他力の働きが自ずから感じられることになる。こうすることで、親鸞は仏教の他力の思想を日本語によって透徹した表現、最高の完成を表現したと言えよう。「円融至徳」として名号をとらえているところこそ、親鸞によって示された大乘仏教の他力の思想の至極だと言えよう。

親鸞は強く他力を主張するのであるが、それは、誰かを対立するものとして否定したり排除したりするのではなく、廻向は如来のレベルのもので、人間の計らいと次元的に異なっていることを主張しているといえよう。それは「不廻向」という表現によってさらに明確化されている。

## 五 不廻向について

「不廻向」は親鸞の他力廻向を表現する言葉として注目されているようである。<sup>82</sup> 親鸞の不廻向についての言葉は次のようである。

是非凡聖自力之行、故名不廻向之行也<sup>(83)</sup>。

就念仏諸善比較対論有（中略）廻向不回向対（後略）<sup>(84)</sup>

是非大小・凡聖・定散・自力之廻向、故名不廻向也。（これ大小凡聖定散自力の廻向に非ず、故に不廻向と名付くる也<sup>(85)</sup>）

(浄土要門、定散二善、方便仮門、三福九品之教のなかの) 不廻廻向対<sup>(66)</sup>。

非凡夫廻向行、是大悲廻向行故名不廻向<sup>(67)</sup>。

真実信心の称名は 弥陀廻向の法なれば 不廻向と名づけてぞ 自力の称念きはる々<sup>(68)</sup>

漢文で、副詞「非」と「不」は同じ否定の意味を表す言葉であるが、「非」は、名詞を否定する言葉であり、「不」は、動詞と形容詞を否定する言葉である。形容詞の前に「不」があることは、その形容詞の意味を否定することになる。例えば「不正義」は正義ではない、「不潔」は潔ではないことを意味する。動詞の前に「不」があることは、その動詞の意味を否定するのではなく、動詞に表わされる動作を「しない」を意味する。例えば、「不労働」は労働しない、「不出勤」は出勤しないことを意味する。「廻向」は漢文で動詞と名詞の詞性を兼有する言葉である。名詞としての廻向を否定する場合、すなわち、「廻向ではない」を表わすときは、「非廻向」であるはずである。「不」は動詞の前に連体修飾語として使われ、意志の否定を表し、「……せず」を意味する。「不廻向」は廻向しようとする人間の意志を否定する言葉である。

親鸞においては、「不廻向」という言葉は「廻向しない」とのことであるが、その理由は、次のようである。廻向は、徹底的な利他の行為で、それは人間の計らいの次元で廻向しようとしても不可能なのである。廻向は、人間の計らいのレベルでの廻向しようとする意志が根底から破られるところにこそ、可能になる。そのときもはや人間の計らいが無用になるのである。

そういう意味で、普通、「……をする」という意志を表す動詞の体は、「廻向」という動詞の場合には、成立しないことになる。

「非大小・凡聖・定散・自力之廻向、故名不廻向也。」

という文を文法的に分析するならば、主語は「廻向」であり、述語は並列された二つ文「非大小・凡聖・定散・自力之廻向」と、「故名不廻向也」である。

「非大小・凡聖・定散・自力之廻向」は「非」という否定語を使い、「大小・凡聖・定散・自力の廻向ではない」との意味であるが、「故名不廻向也」は「不」という否定語を使っているのでこの「廻向」は動詞であり、「廻向しない」を意味する。

前半の否定の文を肯定の形で言うならば、この文は「廻向是如来之廻向故名不廻向也。」(廻向は如来の廻向なり、故に不廻向と名付くる也)

とすることになる。

「不廻向」とは、廻向はあくまでも他力の働きのレベルのもので、人間の意志のレベルとは次元的に異なり、廻向には人間の意志によってする余地は残されていないと断言する言葉である。

【愚禿鈔】に「頓極・頓速・圓融・圓滿之教である」「本願一乗海」に対する「浄土要門、

定散二善、方便仮門、三福九品之教」の中で「対」一つとして「不廻廻向対」が上げられている。そこに、不廻向と廻向を対立するものとしてとらえることを「圓融・圓滿」という「本願一乘海」と次元の異なる「定散二善、方便仮門」等人間の計らいのレベルのものであることが示されている<sup>(89)</sup>。

次の正信念仏偈の言葉に、親鸞は自己の他力廻向思想が仏教の源流から汲み上げられたものであることが語られていると思う。

(釈尊)「如来所為興出世 唯説弥陀本願海 凡聖逆謗齊回入 如衆水入海一味」  
(竜樹)「顕示難行陸路苦 信楽易行水道楽 憶念弥陀仏本願 自然即時入必定」  
(天親)「廣由本願力廻向」  
(曇鸞)「報土因果顕誓願 往還廻向由他力 正定之因唯信心 惑染凡夫信心発」  
(道綽)「道綽決聖道難証 唯明浄土可通入 万善自力貶勤修 円満徳号勸専修」  
(善導)「善導獨明仏正意 矜愛定散與邪惡 光明名号顕因縁 開入本願大智海」  
(法然)「本師源空明仏教 憐愍善惡凡夫人 真宗教証興片州 選択本願弘惡世」  
…… 唯可信斯高僧説<sup>(90)</sup>。

特に「唯可信斯高僧説」という文は「唯」という副詞の限定によって自己の説のよところは師祖たちの説の他にないとはっきり言明している。

#### 注

- (1) 『真宗聖教全書』二 3 頁
- (2) 『真宗聖教全書』二 106 頁
- (3) これまでのところ、親鸞の廻向についてのとらえ方は、次のような見解がある。  
「親鸞の廻向は徹底的に弥陀から衆生への廻向、すなわち、他力廻向であり、これが親鸞独特の理解である。」「もともと廻向に往相還相の二種を語っているのは『論注』である。そこでは行者の側の廻向が語られている」星野元豊 講解『教行信証』（法蔵館 平成9年2月）36 頁  
他の廻向についての先行研究の参考文献  
星野元豊『親鸞』（岩波書店 1971年4月）499 頁  
岡村周薩編纂『真宗大辞典』永田文昌堂刊 昭和47年11月 1698 頁。  
高木昭良『『教行信証』の意識と解釈』永田文昌堂 平成6年10月 52 頁  
広瀬 惺『本願の仏道』文栄堂 1998年10月 143～158 頁  
桐溪順忍『『教行信証』に聞く』（教育新潮社 昭和57年11月）104 頁
- (4) 『真宗聖教全書』二 49 頁
- (5) 『真宗聖教全書』二 103 頁
- (6) 『真宗聖教全書』二 124 頁
- (7) 『真宗聖教全書』二 22 頁

- (8) 『真宗聖教全書』 二 600 頁  
 (9) 『真宗聖教全書』 二 25 頁  
 (10) 『真宗聖教全書』 二 57 頁  
 (11) 『真宗聖教全書』 二 146 頁  
 (12) 『真宗聖教全書』 二 575 頁  
 (13) 『真宗聖教全書』 二 63 頁  
 (14) 『真宗聖教全書』 一 24 頁  
 (15) 『大般若波羅蜜多經』 卷第五百五十八  
 (16) 『小品般若波羅蜜經』 卷第三  
 (17) 「文類聚鈔」『真宗聖教全書』 二 450 頁  
 (18) 「唯心鈔文意」『真宗聖教全書』 二 633 頁  
 (19) 『真宗聖教全書』 二 66 頁  
 (20) 『仏学辞典』 江蘇広陵菖蒲刻印社 1991 年 7 月  
 (21) 『仏学大辞典』 文物出版社 1984 年 1 月  
 (22) 同 21  
 (23) 『真宗新辞典』 法蔵館 昭和 58 年 9 月  
 (24) 『真宗聖教全書』 一 383 頁  
 (25) 『真宗聖教全書』 一 389 頁  
 (26) 『真宗聖教全書』 二 116 頁  
 (27) 『真宗聖教全書』 二 131 頁  
 (28) 『真宗聖教全書』 二 128 頁  
 (29) 『真宗聖教全書』 一論註 117 頁  
 (30) 同 28 『大乘義章』 第四十四卷第九 『大藏經』 1852 頁  
 (31) 『真宗聖教全書』 二 115 頁・293 頁  
 (32) 『真宗聖教全書』 二 466 頁  
 (33) 『真宗聖教全書』 二 467 頁  
 (34) 『真宗聖教全書』 二 468 頁  
 (35) 『真宗聖教全書』 二 151 頁  
 (36) 『真宗聖教全書』 二 14 頁  
 (37) 『真宗聖教全書』 二 66 頁  
 (38) 『真宗聖教全書』 二 118 頁  
 (39) 増上縁は深い仏教的な背景を持つ言葉である。天親は『俱舍論』の中で因と縁について論じる際に、因を六種類、縁を四種類にしている。その中で真如のレベルの因を「能作因」、縁を「増上縁」と名付ける。能作因は、諸法が生じようとするとき、ほかのものに妨害させずに、生じさせる根元的な因である。増上縁は、それが成長させる力を与える根元的な縁である。二者表裏一になって真如の力を顕す時増上縁という。「無障」と「与力」はその特徴を示す言葉である。「能作因」は、「無障」と言い、「増上縁」は「与力」という。人間を救済する際にその力は宿業から人間を救い出すとして働く。「滅罪」と「証生」という働きである。例えば信心が生じようとするとき、宿業に飲み込まれないように信心を守護し、それをして信心として生じ、信心として成長していく因と縁は、増上縁である。【教行信証】の総序での「弘誓の強縁」の「強縁」も「増上縁」の別名である。【真宗聖教全書】二 p40 【真宗聖典】p201 参照)  
 (40) 「曇師の説にては柱相超相の二回向は共に衆生がほかの人々に廻向する利他行であって能廻向の人は衆生であり、(中略)二種廻向を、曇師は衆生に属し……)と曇鸞の廻向と親鸞の廻向の異なりについて論じる所を【真宗大辞典】「二種廻向」条を参照する 岡村周薩編纂 永田文昌堂刊)  
 (註 「還相廻向が如来の廻向であると言うことは、曇鸞大師の上にはないわけである。(中略) 廻向は自分がする」【増我量深選集】九 196 頁)  
 広瀬 惺【本願の仏道】文栄堂 1998 年 10 月 126～137 頁 参照  
 金子大栄【「教行信証」講話】文栄堂 平成 4 年 12 月 「初めから終いまで【詮註】には「願

力」とか「願心」とかいうことを持って『浄土論』全体を説明してあります。」

- (41) 『大乘義章』第四十四卷第九『大藏經』1851 頁
- (42) 『大乘義章』第四十四卷第九『大藏經』1851 頁
- (43) 慧遠の廻向論について
  - 1 自力であることとしてとらえ方は、『真宗大辞典』岡村周薩編纂 永田文昌堂刊「廻向」条を参照にする。
  - 2 如来の廻向と衆生の廻向も含まれるものだとのとらえ方は、桐溪順忍『「教行信証」に聞く』上巻 105 頁参照 教育新潮社 昭和 57 年 11 月
- (44) 『真宗聖教全書』二 37 頁
- (45) 『真宗聖教全書』二 35 頁
- (46) 『真宗聖教全書』二 33 頁
- (47) 『真宗聖教全書』二 482 頁
- (48) 『真宗聖教全書』166 頁 星野元豊『親鸞』（岩波書店 1981 年 1 月参照）
- (49) 『真宗聖教全書』二 14 頁
- (50) 『真宗聖教全書』二 44 頁
- (51) 『真宗聖教全書』二 483 頁
- (52) 『真宗聖教全書』二 113 頁
- (53) 『真宗聖教全書』二 15 頁
- (54) 『真宗聖教全書』二 456 頁
- (55) 『真宗聖教全書』二 60 頁
- (56) (同上)
- (57) 『真宗聖教全書』二 17 頁
- (58) 『真宗聖教全書』二 72 頁
- (59) 『真宗聖教全書』二 45 頁
- (60) 『真宗聖教全書』二 41 頁
- (61) 『真宗聖教全書』二 135 頁
- (62) 『真宗聖教全書』二 23 頁
- (63) 『真宗聖教全書』二 25 頁
- (64) 『真宗聖教全書』二 72 頁
- (65) 『真宗聖典』241 頁
- (66) 『真宗聖教全書』二 12 頁
- (67) 『真宗聖教全書』二 563 頁
- (68) 『真宗新辞典』42 頁
- (69) 『真宗聖教全書』一 962 頁
- (70) 『真宗聖教全書』一 937 頁
- (71) 『真宗聖教全書』二 551 頁
- (72) 星野元豊 講解『教行信証』492 頁 法蔵館 平成 9 年 2 月
- (73) 『真宗聖教全書』二 111 頁
- (74) 『真宗聖教全書』二 65 頁
- (75) 『真宗聖教全書』二 502 頁
- (76) 『真宗聖教全書』二 730 頁
- (77) 『真宗聖教全書』二 575 頁
- (78) 『真宗聖教全書』二 522 頁
- (79) 『真宗聖教全書』二 36 頁
- (80) 『真宗聖教全書』二 106 頁
- (81) 『真宗聖教全書』二 16 頁
- (82) 今まで不廻向について次のような理解がある。
  - 1 「親鸞聖人は如来からの廻向を如来廻向といい、衆生からは不廻向だと説き、衆生廻向は自力廻向だからいけないと否定されるのであります。」桐溪順忍『教行信証』に聞く 106 頁 教育新潮社 昭和 57 年 11 月

2 衆生が自力の善根を往生のために差し向けるのではないこと、往相も還相も行も信も本願力の廻向であり、衆生からすると不廻向である。(『真宗新辞典』法蔵館)

- (83) 『真宗聖教全書』 二 33 頁
- (84) 『真宗聖教全書』 二 41 頁
- (85) 『真宗聖教全書』 二 65 頁
- (86) 『真宗聖教全書』 二 459 頁
- (87) 『真宗聖教全書』 二 444 頁
- (88) 『真宗聖教全書』 二 520 頁
- (89) 『真宗聖教全書』 二 459 頁
- (90) 『真宗聖教全書』 二 43 ~ 46 頁